

カール・ドライス



カールスルーエにて 1785 年 4 月 29 日生

カールスルーエにて 1851 年 12 月 10 日没

略年譜

カール・ドライス、洗礼名カール・フリードリッヒ・クリスティアン・ルードヴィッヒ、男爵
ドライス・フォン・ザウアブロンは、最初はバーデン大公国の林務官であったが、後にその職を
離れ、給料をもらいながら発明家として人生を歩むこととなった。

彼の発明品としては、特に、楽譜タイプライター、速記機 (16 文字使用可能)、2 種の四輪人
力車があげられるが、とりわけ注目すべきは、二輪速歩機である。これは、最初 1817 年 6 月 12
日、マンハイムにて発表された。世界初の自走式二輪車であり、その結果、馬力によらない移動
手段のさきがけとなったのである。数十年後、ピエール・ミシヨールにより、この速歩機はペダル
をもった自転車へとさらに発展し、最終的にカール・ベンツによるオートモビルの発明へとつ

なだった。この速歩機の発明によって、カール・ドライスは、バーデン大公カールにより機械工学の教授に任命された。彼の発明品で、小さな、人力で動かす鉄道用乗り物は、現在の鉄道用走行車ドライジーネの原型となった。

カール・ドライスは、信念のある民主主義者として、1849年自身の貴族の称号を捨て去ったが、それゆえに、バーデンにおける革命の挫折後は、当然ながら、大きな経済的打撃をこうむった。さらに、悪質な中傷によって、二輪車の発明という彼の成功も、後に否定されてしまうことになった。

ドライスの見直し

ハンス=エアハルト・ レッシング教授は、広範囲にわたる文書研究に基づいて、速歩機発明者カール・ドライスの新しい伝記を描いている。教授は、150年来「奇妙でばかけた」存在として軽蔑をもって語られてきた貴族出身の林務官というドライス像にかわって、非凡な才能に恵まれ理想に満ちた若者、そして後の1849年には、信念をもった民主主義者というドライス像を認めたのである。

カール・フォン・ドライスは、1785年4月29日、バーデンの中心都市であったカールスルーエにて、バーデンの宮廷行政官吏であったカール・ウィルヘルム・フリードリッヒ・ルートヴィッヒ・フォン・ドライスと、その妻エルネスティーネ・クリスティーネ・マルガレータ(旧姓 フォン・カルテンタール)の息子として生をうけた。彼の名付け親は、辺境伯カール=フリードリッヒ・フォン・バーデンであり、彼が後にドライスを林務官に任命することになる。

カール・フォン・ドライスはカールスルーエで修学時代を送り、1800年にギムナジウムの実科を終えると、自身のおじフリードリッヒ・ハインリッヒ・ゲオルグのもつプフォルツハイムの私立林務学校に入った。しかし、林務官職の希望者が多数であったために、彼は最初1803年から1805年までハイデルベルクにて数学、物理学、建築学を学び、それからバーデンの林務官となった。しかし、後に、彼は教職と発明のために、林務官としての経歴を捨て去ることになる。

ドライスの父は、バーデンの高等宮廷裁判官の長となり、一家は1810年マンハイムに引っ越した。ドライスは、1811年に林務官の職を解かれ、その後も給料はもらいながら、一家と同じくマンハイムに移った。彼は、自動式楽譜タイプライター(1812年)、ならびに2種の四輪人力車(1813年・1814年)を発明したが、その2種目はウィーン会議にも出品された。さらに彼は、数学の学術論文を著し、そして最終的に二輪速歩機(1817年)を発明したのである。

ドライスによる乗り物の発明は、タンボラ山噴火（インドネシア、1815年4月）の火山灰の結果生じた1816年の冷夏、そしてその後の飢饉において頂点に達することになる、1812年以降の一連の凶荒にたいして応えたものであった。食料穀物の不足のため、多くの馬匹を屠殺せざるを得なかったのである。

それゆえに、二輪速歩機は同時代の人々にとって馬の代替品としてきわめて高い関心と呼ぶものであり、1817年6月12日木曜日にマンハイムからシュヴェツィンガー中継所（現在のマンハイム市域ラインナウ）まで舗装街道を使っておこなわれた伝説的な処女走行は、馬を使わない移動手段のいわばビッグバンであったといえよう。彼の発明は商業的利益をもたらすものであったが、バーデンの官吏として俸給をもらっていたがために（実際の仕事はしていなかったが）、ドライスはその利益を求めることを禁じられた。副業は絶対禁止であったのである。



そうはいつても、ドライスには、1818年1月12日若き大公カールによって、速歩機に関する10年間の大公特権が与えられ、さらに、発明者恩給というかたちで今までの給与を継続した状態で、機械工学の教授に任命された。

当時、車道は荷車によってわだちが深く刻まれていて、ドライス式速歩機の走行には適していなかった。そのため、速歩機を運転する者は、町中では車道よりずっと滑らかな歩道を好んで走ったが、当然ながら歩道では、速歩機のスปีドは速すぎた。結果として、警察による速歩機禁止のきまりとそれにたいする厳しい罰則が、イングランドやアメリカ合衆国でも、さらにはカル

カッタにおいても定められた。これらの動きは、来る二輪交通を長年にわたって阻害した。

カール・ドライスは、1822年ブラジルへと旅にでて、そこで彼は、測量技師として働いた。

1827年にマンハイムに戻ってきた後に、彼は16文字使用可能な速記機を発明した。

ドライスの父は、1830年に死去する。この結果、カール・ドライスは、並はずれた発明家としての成功を裏付けた力強い父親の援助を失ってしまったばかりでなく、今や父親の政敵の攻撃にさらされることになり、迫害をうけるに至った。

1838年の謀殺計画を生き延びた後、彼は1839年から1845年まで、オーデンヴァルトのヴァルドカッツェンバッハで過ごした。この間ドライスは、カールスルーエにおいて鉄道レールの上を走る脚式走行車のテストをした。それゆえに、ドライジーネという名称は、今日まで鉄道用語として流通している。そして、その後、彼は生まれた町に再び舞い戻った。

バーデン革命の支持者として、カール・ドライスは1849年自身の貴族としての特権を公的に放棄し、民主主義への支持を表明した。革命の挫折によって、カールには厳しい時代がやってくる。彼は非常な悪意によって迫害され、財産も没収され、精神病患者として保護観察下におかれた。彼の恩給は、プロイセンの占領軍によって革命資金償還として押収され、1851年12月10日、カールスルーエでひっそりと亡くなった。

ゲルト・ヒュットマン博士（茂木香・藤井崇訳）



子供切手シリーズ「ドイツにおける1817年から1925年までの自転車の歴史的発展」カール・ドライス生誕200周年に寄せて（ドイツ連邦共和国、1985年）